
クルトゥース断章

高田 玄武

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クルトゥース断章

【Zコード】

Z8325C

【作者名】

高田 玄武

【あらすじ】

ある朝、酷く悪い夢を見て目を覚ますと男は記憶を全て失っていました。自分の名前さえ思い出せない男は、一つだけ、自分が何かを探していることを本能で思い出す。ポケットの中にただ一枚の紙切れ。手掛かりはそれだけだ。　貴方は、何の為に生まれ、誰の為に死にますか？

第一幕 暗闇

- 1 -

・・・浅い眠りは嫌いではない。
薄い暗闇の淵に身を寄せている間は、心を落ち着かせていられる。
ほんの一時の安らぎ。現実と非現実の狭間に身を委ねられる瞬間。
しかし、やがて暗闇は深くなる。宙に浮く、むしろそれは地に墜ち
ゆく感覚。

全身の力は思うよつに入らず、脱力した躰と四肢は拠を求め、何か
に取り憑かれたかの如く、必死であがく。
永久に続くかと思うほどの中の暗闇。それは恐ろしいほどの中寂か、雜
音か、虚無、いや、その全てであろうか。

ひたすらに堕ちゆきながら、尚も果ては在らず。
やがて、暗闇は一つに、雜音は言の葉にて、虚無はその姿を留めなが
ら絶望へと変える。

「死ね！」

言の葉は酷く乱雑にまとまり、精神を一瞬湾曲させる。

死ね、と。死にたいはずはない。だからこそ、永久の暗闇の中を墮
ちながらも、救いの手を求めてあがいている。なのに、死ねと？

「死ね！死んでしまえ！お前なんて要らない！死ね！死ね！」

暗闇に響く声。正しくは声ですら、いや音ですらない。それは、精
神へと直接注ぎ込まれる言の葉。
力の入らない両の腕を、更に捻らせ、尚も救いを求める。

「お前など産まれてこなければよかつたんだ！」

乱雑に紡がれるその言の葉はやがて、救いを求める行為を諦めへと促す。

ああ、もういい。それならば、いつそのこと殺してくれ

。

「死ね！死んでしまえ！」

諦めたにも関わらず、何度も繰り返されるそれ。

死ね 殺してくれ

死んでしまえ これ以上苦しめるな

産まれてこなければ 早く楽にしてくれ

第一幕 田覚め

- 2 -

「 つー！」

・・・ 酷い吐氣と眩暈、嫌悪感で俺は目を覚ました。
陰鬱な空氣を肺一杯に吸い込み、呼吸を整えようとするが、左胸の辺りで碎け散りそうなほどたうつ臓器の音は、一向に止む気配はない。

全身からは大量の汗が吹き出し、背中にまとわりつくシャツが更に不快感を増幅させる。

ようやくなんとか落ち着いてきた肺を、シーツの淀んだベッドから起こすと、俺は鏡を覗き込んだ。

・・・ 誰だ、これは？

鏡に映ったのは、青白い肌に、充血した眼を大きく見開いた、知らない男の顔だった。

頬に手を当ててみる。形、体温、感触。
それをとっても、脳裏の片隅にすら存在しない。伸ばし放題の頭髪を軽く引っ張つてみた。
・・・ 本物だ。特殊メイクでもなければ、マスクを被っているわけでもない。

この男は何者だ?
ここは一体どこなんだ?
俺は昨夜何をしていた?

いくつかの自問自答を繰り返していくうち、最も大きな難問が在ることに気付いた。

そもそも、俺は一体何者なのか？

俺はなぜこんな処に居るんだ？

思い出そうとすればするほど、疑問は更に疑問を生む。つまりは、何も思い出せないのだ。

自分の名前、住所、年齢、職業、家族・・・記憶の糸をひたすらにたぐり寄せてみるが、そこには何もない。思い出すどころか、存在していらないのである。

それでも、鏡に映る男の顔が、本来の自分の顔ではないことだけははっきりと解った。違和感、ということべきであろつか。確かにこの顔は自分のモノではない、ということだけは鮮明に理解した。とはいえ記憶がないのだから、本能の指示以外の何者でも無いのがあるが。

俺は考える。

記憶を辿るのは諦めた。

これ以上思い出そうとしても時間の無駄だと気が付いたからだ。元々存在し得ぬモノを思い出すことなど不可能だ。まずは現実を直視しろ。その上で最善だと思つ行動を取れ。

そう考え、俺はベッドから起き上がり、両の腕と脚を動かしてみる。

- ・・・ 脳に違和感はない。先程まで眠っていたせいか、少々ふらつきはしたが、何処にも異常はない。記憶を失っているならば、身体に外的な衝撃を受けたのかも知れぬと考えたが、それも要らない心配だったようだ。

それならばと、部屋の中を見渡す。部屋はワンルームで、周囲には先程まで使っていたベッド、その横には鏡を置いてあるそれほど大

きくない引き出し付きのキャビン、そしてカーテンの閉まつた四角い窓の横に、黒い「T」型の掛つている簡易型の上着掛けがあるだけだ。

至つてシンプル。飾りつ氣もないが、散らかつてゐる様子もない。生活の匂いが全くしないのだ。

ということは、この部屋は休息の為だけに使つてゐる、或いは引つ越して間もないか、などが推察されるのだが・・・。しかし後者であればまだ開かれていない引っ越しの荷物の詰まつた箱が一つ二つ在つてもいいようなものだが、そんなモノは一つもない。さもなくば、この部屋の持ち主は、生来、モノを持つことを極端に嫌つていたか・・・。

だが、生活をするとなれば、最低限の日用品くらいは必要になる。しかし、この部屋にはその必要最低限の物資、カップや冷蔵庫すら存在しない。となると、前者、つまり、休息の為だけにこの部屋を使っていた可能性が極めて高い。何より、つい今しがたまで実際にそこでのベッドで休眠をとつていて自分が居たことがそれを裏付ける。

しかもこの部屋の尋常でないモノの少なさから察するに、部屋の持ち主 つまり自分は、いつでも部屋を空けられる準備でもしていたのだろう。何故だ? 単身で各地を渡り歩くような仕事でもしていたのだろうか。もしくは、何かに追われるような

第三幕 疑心暗鬼

- 3 -

嫌な感覚が脳裏と背中を冷やす。

追われている？俺が？

だとしたら、此処で居るのは危険だ。とはいえ、それならば他に何処で居ようが、安全な場所など思い付かないが。

思考と現状を照らし合わせて、今どうすることが得策かを必死で思案する。

落ち着け。追われているにしても、何も今すぐに逃げる必要はない。この部屋が身を隠す為の籠城ならば、少なくとも今はその役目を果たせているのだろう。俺はカーテンを開いて外を見る。目の前に現れたのは壁。他の建物の壁面だろう。真下を覗き込むと、そこは狭い路地。どうやら、界隈からは離れた場所らしい。辺りには人の気配はない。少なくとも、此処からは人影を確認することは出来なかつた。

俺は少しだけ胸を撫で下ろし、次にすべき行動を考える。

そうだ、持ち物だ。

今俺が身につけているものは、素肌に胸ポケット付きの灰色の開襟シャツ、それに紺色のジーンズのみ。俺はジーンズのポケットを漁る。

ポケットからまず出てきたのは、それほど大きくはない銀色の懐中時計。それから、黒ずんだ銀色のオイルライター。よく使い込まれている。着火石は刷り減っていない。着火ドラムを回すと、シュボつと音を立てて芯材に引火する。・・・オイルも十分に補充されているようだ。

シャツの胸ポケットを探ると、白地に紅いマークの入った紙の包装に、数本残った、少し折れ曲がったフィルター付きの煙草を見つけた。どうやら、この躰の持ち主は愛煙家だったらしい。俺は折れ曲がった煙草を指で整え、唇に挟みフィルターを噛むと、息を強く吸いながら煙草に火を点ける。紫煙が辺りに立ち込むと同時に、芳ばしい煙が肺の中を侵食してゆく。

強かに紫煙を吸い上げると、肺に溜りきらなくなつたそれを一気に吐き出す。

・・・頭が、心地好い痺れとともに冷めわたる。躰中の血液が、落ち着きを取り戻してゆく。

俺は、一通り煙を吸い終えると、更にジーンズのポケットを探る。次に出てきたのは、紙切れ。くしゃくしゃになつていてそれを広げて、しわを直すと、掌くらいの大きさになる。紙には黒インクで、文字が書かれている。

『27番街 テスタロッサ 18時』

なんだ？ 番地と・・・テスタロッサ？ 店の名か何かか？ 時間まで記入しているといつことは、誰かと待ち合わせでもしているのだろうか。

俺は懐中時計を見る。時刻は、15時を指した辺り。

「三時間・・・か。」

誰にともなくそう呟く。この紙切れに書かれているのが誰かとの待ち合わせだとして、それが今日であるという保証はどこにも無い。もしかしたらすでに片付いた約束なのかもしれないし、明日、いや、一週間後の今日以降である可能性もある。

それでも何かの手掛けにはなるかもしない。どちらにしても、この部屋にずっと居続けるわけにもいかないのだ。

大分長く伸びた煙草の灰を鏡の横の空き缶に落とすと、コートの掛けた上着掛けがある窓際に近付く。この部屋からは、外が暑いのか寒いのかすらも分からなかつたが、薄出のシャツ一枚で外に出るには心もとない。少なくとも、この時間にこの気温ならば、真夏だというわけではないだろう。

俺はコートに手を掛ける。上着掛けからコートを解放した瞬間、ゴトッといつ重い音と共に、何かが床に落ちた。

なんだ？

床に落ちた重量感のあるソレを拾おうと手を伸ばした。

っ！？

そこにはあつたのは、落とした音よりも更に重々しく、黒く光る、鉄の塊。

第四幕 鉄の塊

- 4 -

床に転がった、重々しい鉄の塊を見て、愕然とする。
別にそれ 拳銃自体が珍しかったわけではない。

俺はその存在を知っていたし、この世界が、元の自分の知つてゐる世界なのであれば、この黒い凶器を日常的に見ることもあったからだ。

しかし、何よりその殺傷能力のある凶器が、自分のものであらう部屋に存在していたことだった。

つまりは、コイツが必要な何か、護身用か、それとも本来の目的である殺傷用かは知らないが、少なくとも、コレを携帯することが必要な状況にある、という事に驚愕したのだ。

生活臭の薄い、何もない部屋。

足元に転がる、冷たい、黒く光る凶器。パズルが一つ、組み上がった。その時、存在すらしていなかつた記憶がうつすらと極断片的にではあるが蘇つた。

俺はこの凶器を知っている。もちろん、コイツの扱い方も熟知している。そして、俺は誰かに追われているわけではない。逆に、何かを追い続いているのだ。

ソレが何かは分からぬ。ただ、俺は確かに何かを探して、追い続けている。人なのか、物体なのかすら定かではないが、何かを追い続いている。

確信したのだ。

危険があることに違いはない。こんな物騒なものが必要な程である。だが、俺はその探し物を必ず見つけなくてはならない。俺の中にあら、未だはつきりとしない記憶が、確かにそう告げている。俺は、足元に転がったそいつを拾い上げた。

掌にずしりと重くのしかかる重量感。

　　スライドを確認して、

マガジンを抜く。弾丸は込められていない。

辺りを見回して、それらしき場所を探す。

ベッドの横のキャビンの引き出しを開ける。

あつた。

紅い箱。スライドさせると中にはきつちりと詰まつた、小型拳銃用の弾丸。　　8ミリパラペラム弾だ。弾を一個ずつ引き抜くと、ソレをマガジンに込める。12発。

全弾を込め終えると、マガジンをグリップ下から銃身へと戻す。暴発防止用の安全装置のスイッチをスライドさせ、腰に留めたベルト型のホルダーに収納し、背中のほうへ回す。

よし。これで大丈夫だ。

弾丸の詰まつた紅い箱を元のキャビンへと戻す。
俺は「一トを羽織ると、ポケットの中を探る。

出てきたのは、部屋のカギらしきものと、いくらかのコインと、紙幣。これだけあれば、しばらくは大丈夫だ。何より、通貨が俺の知つているものと同じだったことに安心した。少なくとも、俺の記憶にかすかに残っている生活の断片と、それほど違わないことだけは確だと確認できたからだ。

俺は、再度胸のポケットから曲がつた煙草を取り出し、火をつける。
そして、考える。

メモに殴り書きされた約束の時間と思わしき時刻は六時。ちょうど今の時刻が四時。地理的な感覚はないが、書かれているのが番地名と店らしき名前だけなからすれば、そう遠くはないはずだ。車のカギらしきものが見当たらないことから、徒歩、或いは地下鉄か何かで行ける距離なのだろう。

しかし、逆に番地名までメモに残すということは、初めて行く場所なのかもしない。これが俺の字であるのなら、だが。

まずは、地理を把握しなければならない。ここが何処で、なんという地名なのか。番地名、それから、目的の場所は近いのか。兎に角、外へ出る。扉を開けたが、上下へ続く階段があるだけだ。他には何もない。壁も廊下もアスファルト造りで、階段を降りる靴の足音が周囲に響く。フロアを一つほど降りると、そこは路地。先程部屋から見下ろした路地裏だろう。人一人が通るのに肩がぶつかりそうなほど狭い。

俺はカーテンの掛けた自分の部屋を見上げる。五階建ての建物は、周囲の背の高い建物の壁に囲まれている。間から覗く空は、どんよりと曇っている。部屋を出る時には気にならなかつたが、少々肌寒い。

煙草を地面に押し付けて完全に火を消し、吸い殻をコートのポケットに入れる。まずは、辺りの検索だ。詳しい手振りを求めて、俺は街のほうへ脚を伸ばした。

第五幕 遭遇

- 5 -

手掛けりは、存外すぐに見付かった。

路地裏を抜けたすぐそこはメインストリートで、丁度夕飯の準備や、帰宅を急ぐ人々の群れで賑わいでいた。路上に立っている案山子のような案内標識に書かれた文字。

『サウスロタ タウン 25 ストリート』

つまり、この通りは、サウスロタという街の25番街だということになる。

目的の住所は、27番街。もし同じ街なら、そう遠くはない。
三十分くらい歩けば着くだろうか。

そんなことを考えながら、人ごみの中、標識を頼りに、目的の27番街へと歩みを進めた。

人混みを縫いながら、歩くこと一時間。思つたより時間は掛つてしまつたが、27番街の立て札を見つけた。大丈夫だ、まだ時間はある。

俺は、「テスタロッサ」を探す。街の様子は、先程の25番街と比べると全くの別物だつた。壊れかかつた看板。淀んだ空気は、煙臭い。陽は沈みかけ、辺りは大分薄暗くなり、水銀灯の灯りがゆっくりと滲む。

街、というよりは下町と言つたほうが正しいか。先程の25番街とは対極の、薄暗い街。よくよく辺りを伺うと、路地のあちこちから微かに人の気配がする。

見られている？

いや、違う。確かに微かな殺氣のようなものは感じるが、それは俺に向けられたモノではない。といつより、街中に殺氣のような、怨恨のような、黒くて気持ちの悪いモノが渦巻いている。余り、ガラの良い地域じゃない。

早々に店を探そう。余計な面倒に巻き込まれる前に。そう思った矢先である。俺の耳に怒鳴り声が響く。

「待ちやがれテメエっつーー！」

ガラの悪い男の声。声は後ろのほうからだ。声に追われて、何かが駆け抜けてくる。

「 つー！」

逃亡者は、意外にも小さかつた。紺色の帽子にジーンズ姿。

小さな逃亡者と、田が合つた瞬間、肩に衝撃が走る。

「 わ、わわっーー！」

「 つーー！」

小さな逃亡者が、俺の肩にぶつかって派手に転んだのだ。

「 ・・あいたたた・・。」

小さな体。・・・まだ子供じゃないか？深く帽子を被つていてい seiで顔は良く見えないが、少年のようだ。しかし姿を詳しく確認するよりも早く、後ろから追い掛けてきていた乱暴な言葉の主の声がすぐ近くで俺の背中ごしに少年を揺する。

「はあはあ・・・やつと追い付いたぞクソガキつ！..」

・・・「いやら、想像以上に穏やかではない。一体何をやらかしたんだ・・・。

「あ・・・フ！」

少年が、俺の陰に隠れる。・・・嫌な予感がする。

「なんだテメエは？」

「「」のガキの知り合いか？」

・・・思つた通り、面倒なことになつた。相手は一人。体格の良いスキンヘッドの男と、細身のリーゼント。どちらも、普通なら関わりあいにならないほうが良さそつた連中だ。

「・・・。」「

少年を見る。俺を見上げて不安そうな顔をしていてる。・・・やはり面倒なことになつた。

「おいーなんとか言えよ兄ちゃんよおーー！」

「スカしやがつてーテメエも痛い目に会つてえかつー？」

・・・ボキヤブラーの低い言葉。この程度の連中なればそれほど面倒つてわけでもなさそうだ。だが、俺には、やることがある。・・・どうするか・・・？

「んだテメエつ！関係ねえならすつこんでろつ……」

スキンヘッドの男が、俺の肩を掴む。その瞬間、俺は反射的に動いていた。

「 ひつおひつー？」

二、三メートル向こうへ吹っ飛ぶスキンヘッド。肩を掴まれた俺はとつやにスキンヘッドの脚を払い、腕を絡めて投げ飛ばしていた。びゅぢり、この体に染み付いている癖らしい。

・・・やつてしまつた。

リーゼントはとつやのことで、面食らつて呆けている。仕方ない、この場はどつにかするしかない。

「・・・来い。」

俺は、隣で同じよつに面食らつている少年の腕を掴んで走り出す。

「え・・・あつーーー？」

走る、走る。

「ま・・・待てこの野郎つーーー！」

正気に戻つたリーゼントが背中で吠える。が、無視だ。待てと言われて待つ奴はこの状況じゃ考えられない。

走る、走る、走る。

いくつか路地を曲がり、オンボロの看板を通りすぎたところでようやく止まる。男たちが追い掛けてくる気配はない。どうやら振り払つたようだ。

「…………はあっはあっ…………」

右手のほうで、息を切らした少年が中腰になつてゐる。ここでのせいで、時間をくつちまつた……。今、何時だ？

俺はポケットから懐中時計を取り出す。

・・・ 17時50分。・・・ やばい、ぎりぎりじゃないか。

急がないと……ん？

「あ・・・ あの・・・。」

少年が、俺の顔を見上げて不安そうな顔をしてゐる。

「なんだ？ もうあのチンピラは撒いたぞ。」

「い、いえ・・・ その、う、腕を・・・。」

・・・ いかん、腕を掴んだままだつた。

「すまん。・・・ 痛かったか？」

俺は少年の腕を離すと、コートのポケットから煙草を取り出して火を点ける。落ち着いている場合ではないが。

「いえ、だ、大丈夫です・・・ その・・・ あ・・・ ありがとハジケいましたっ！」

俺に向かってペコリと頭を下げる。

「……どうでもいいが、俺は探し物をしている。もしまた見つかつても相手はできません。」

「探し物……? えと、何を探してるんですか?」

少年が、小首を傾げる。

「……テスター。」

簡潔に答える。

「テスター。お店の名前が何か……でしょうか?」

まあ、こんな子供が知っているとは考えにくい。まして、チンピラに追い掛けられるような少年だ。

「……いや、気にするな。そういうわけで俺は急いでいる。待ち合せなんだ。」

「あ……でも……。」

立ち去りうとした俺を引き留める。

「なんだ? 知っているのか?」

「いえ、そうじゃないんですけど……。」

少年は、おどおどと指差す。

「…。
？」

第六幕 テスター・ロッサ

- 6 -

ボロボロの看板。錆び付いた金具で止められたソレに書かれていた文字は

テスター・ロッサ
TESTAROSSA

「こじが・・・テスター・ロッサ・・・。

怪しい。怪しそう。バーでもなければ喫茶店でもない。それどころか、開いているのかさえも疑つてしまつほど寂れた雰囲気。ランプの灯りすら見えない。

「あの・・・探してるのって、『こじ』じゃないんですか？」

少年が俺に問う。

「ああ・・・そうだな、多分こじだ。」

俺の眼は店を見据えたまま動かない。煙草の煙が辺りに立ち込める。時刻は、17時55分。もしも誰かとの待ち合わせの時刻ならば、もうすでに相手が居てもおかしくはない。しかし、建物の中には光らしきものは一つも見えず、誰かが居る気配もない。

俺は、躊躇する。本当にここに手掛けりがあるのだろうか。俺の探している何か、それともこの身体の主が探している何か・・・。だが、考えている暇はない。他に行く宛もない。手掛けりは、ポケットの中の紙切れ一枚のみ。

俺は、意を決して中に入ることにした。古ぼけた扉に向かって一步

進む。

と、
その時だつた。

出できやがれクソガキいつつつ！！！」

先ほどのチンピラだ。トドメを刺さなかつたのが悪かつたのだろう。この声の主はスキンヘッドのほうだ。恥をかかされたのがよほど頭にきたらしく、声からすると、顔を真っ赤にして怒り狂つてでもいるんだね。あの手の連中は中途半端にあしらつと更に面倒なことになる。・・・解つてはいたのだが・・・。

「六！」

少年が息を飲んで、こちらを見る。・・・仕方ない、このまま放つておくわけにもいくまい。

「・・・中に入るぞ。」

俺は再度少年の手首を掴んで、テスタロッサの扉を開ける。

・・・中は、真っ暗だつた。扉を閉める。一瞬、暗闇の中に沈んだ
かのようだつた。外からは何も聞こえてこない。ただ、そこには暗
闇が広がつてゐるだけだ。

奥のほうで何かが光る。

・ なんだ？

それはほんやりと、しかし眼が慣れてくるにつれ、はつきりとした
形に広がる。
蠅燭の灯り？

灯りに向かつて、歩く。段々近づいてくる。

それは、テーブルだつた。

テーブルには、灯りの点いた蠟燭が一本と、三脚の椅子。まるでそこに座れと言つているかのように、ただ蠟燭の光が煌煌と灯つている。辺りを見回すが、そこには何もない。・・・そう、何もないのだ。オブジェや絵画、それこそ壁すら無い様に見える。

「・・・いらっしゃい、良くなれてくれたね、お客人。」

突然、どこからともなく声が響く。澄んだ声。少年か、少女か。ただ、その声はなんとも言えず澄んでいた。まるで、こちらの全てをどこまでも見透かすかのような、そんな鈴のような声。

俺は声の主を探して辺りを見回す。・・・どこだ？どこから・・・。

「どうしたんだい？・・・ああそりゃ、君たちには僕の姿が見えないようだ。来客は久方ぶりでね、ついつい勝手を忘れてしまう。・・・」
「うーだ、ここだよ。」

声の主は、俺の眼の前　　テーブルを挟んで、向かいの椅子に腰を掛けっていた。

第七幕 疑惑

- 7 -

目の前に座っていたのは、美しく光る紅い髪の少年。何もかもを見透かすような碧色の瞳が、にこやかにこちらを見ている。

「改めて、挨拶しよう。僕はアトウラ。初めまして、になるのかな。」

物腰は穏やかだ。しかし、その碧の瞳の光が、何故だか俺をイラつかせる。

「・・・挨拶など要らん。そんなことより・・・貴様は俺のことを知っているのか? 何者だ、貴様は・・・!」

妙に苛立たしくて、少し口調が荒くなる。

「”知っている”? .. そうだね、君達の言葉を借りて言うのなら、僕は君のことをとても良く”知っている”よ。君に記憶が無いことや、今のその躰の主が何者なのか・・・まで、全部ね。」

アトウラと名乗った少年は表情を崩さず、やはりにこやかにそう告げる。

自らの素性を知る者。自分ですら、曖昧な記憶を頼りにここまで来たといつのこと。

「 だつたら教える!.. 僕は何者だ!.. 何故俺には記憶がない!.. ? 一体俺は何を探している!.. ?

苛立ちを隠すこともせず、俺はアトウラに問い合わせる。

「・・・君達の悪い癖だ。一度に答えられるのは一つだけだよ。とりあえず落ち着いて。ほら、後ろの子も脅えてる。何か飲むかい？ そちらはジュースのほうがいいかな？とにかく席にどうぞ。」

悪びれもせず、アトウラは俺たちに席を選める。・・・焦つても仕方ないが、何故だか気持ちが高ぶる。それはこいつの態度のせいなのか、それとも自分自身の不安から来るものか・・・。

「そうだ、良いハーブティーが手に入ったんだよ。一人ともそれでいいよね？嬉しいなあ、誰かとお茶を喫むのも久方ぶりなんだ。」

こっちの気を知つてか知らずか、あくまでマイペースに事を運ぶこの不可思議な少年に、俺は半分呆れていた。

こいつなら、興奮しても始まらない。とにかく俺の記憶の手掛りを持つているのは現状ではこいつだけなのだ。俺は向かって右側の席に腰掛ける。後ろの少年もおずおずと席に着く。

「・・・賢明だね。どうやら、ただの熱血漢というわけじゃなさそうだ。ちょうど良じよ、このジャスミンティーには心の高揚を抑える効果もあるんだ。」

自らティーポットに煎れたハーブティーを、カップに注ぐ。そして、俺と少年の前に差し出す。

「・・・御託はいい。それより、知つてることを全て話せ。それからだ。」

尚も問い合わせる俺に、若干呆れたような素振りを見せる。

「やれやれ、君はせつかちだねえ。・・・じゃ、何から話やうかな
?」

「やつと核心に入るらしい。・・・」のアトウリとこいつ少年と話して
いのとペースが乱れるな・・・。

「まあ一つ田だ。俺は何者だ?」の躰は誰のものだ?」

「ほり、質問は一度に一つだつて言つてゐるの?」・・・ま、仕方な
いか。君達はみんなそうだしね。じゃあ答えよつ。君は『始まりの
子』。その躰は、ある不幸な死を遂げた男の躰だ。」

「『始まりの子』・・・?ビツコツことだ?」の躰の主は死んでい
る・・・?」

「ああ、『めんじめん、解りづらかつたかな?簡単と言つと・・・
君の元の躰はすでにこの世界には無い。同じよつて、その躰の主の
場合、君達が『魂』と呼ぶもの・・・中身だけがこの世界から消え
てしまつたんだ。」

「つまり・・・中身のない器に、俺といつ中身・・・魂が入り込ん
だつてわけか?」

馬鹿げた話ではあるが、現状を考えると、夢やおどき話の世界の話
だとも言つてられない。もしやつなら、俺がこの躰に違和感を感じ
たのにも納得がゆく。

「やうそ、そういうこと。話が早くて助かるよ。すぐには信じな

いと思つたんだけど。」

アトウラが軽く拍手をしながら微笑む。

「始まりの子とはなんだ？俺の魂は何故この男の躰に入り込んだ？」

「やれやれ・・・君が幾ら質問しても答えられるのは一つずつだよ。まずは、『始まりの子』・・・そうだね、君は転生・・・生まれ変わりという言葉は知つていいよね？」

「生まれ変わり・・・キリスト教で言つところの、神の再来というやつか。この世の終わりに、イエス＝キリストは人の姿を模して、世界に降臨する・・・メシア（救世主）論だな。」

「博学だねえ。そう、救世主。遙か昔・・・神に生命を賜つた始まりの子、アダムは、自ら禁じられた果実を手にし、忌まわしい捕われの肉の躰に墮ちた・・・。これは旧約聖書だね。でも、これはちよつと違う。長い長い時を経て、人が造り出したとても良く出来たお話を。君達は何かにつけて『理由』を欲しがるように造られたようだからね。生きることにも、死ぬことにもやら理由を求める。・・・だけど、たつた百年程度しか生きられない人間にしては、よく『記憶』を伝えてこれたと感心するけれど。」

アトウラは肩をすくめると、更に続ける。

「でも、伝承や宗教なんてのは全部、『理由』を欲しがつた人間たちが都合のいいように解釈したお話に過ぎない。・・・君達が『神』と呼ぶ存在が生み出したのは、一握りの『魂』。正確には、肉体は、この一握りの魂を入れる器に過ぎなくて、生み出されたのは、魂と

名のつく記憶母体だけ。それを地球という環境で活かす為には、肉体という器が必要だつたからついでに造つたのさ。魂に保存する記憶の損傷を出来る限り防ぎ、少しでも効率を上げる為に、じじ丁寧に痛みや恐怖、幸福感や快感なんていう余計なオプションまで付けてね。

「つまり、そこで最初に生み出された魂・・・それこそが始まりの子・・・」

「そう。そして更に神様は、効率を上げる為に魂のコピーまで造り上げた。肉体という器を介して、とにかくたくさんの記憶をオリジナルの魂に保存できるようにな。それが生き物の繁殖機能さ。ただし、オリジナルの記憶母体・・・即ち、始まりの子の魂だけはコピーで代用することは出来ない。だから始まりの子の魂を宿した肉体が消滅すると、次の新しい、出来る限り波長の合う肉体に転移するよう細工を施した。それが生まれ変わり、転生するってことなんだ。」

「

「・・・。」

理解できないことはないが、余りにスケールの大き過ぎる話だ。俺が始まりの子で、オリジナル・・・？

「本来なら、転生した時点で前世での記憶は、器に合わせて調整される。だから、普通なら前世での記憶をそのまま残して転生することなんて有り得ない。だけど君の場合、なんらかの原因で、新しい肉体に転移されずに、すでにコピーの魂が役割を終えた後の器に転移した。だから、リセットされずにそのままの記憶で生きているというわけさ。ただイレギュラーなだけに調整が巧くいかずに、記憶をちゃんと取り戻せてないわけなんだけどね。」

「・・・そんな話を、俺に信じろと？」

「別に信じる信じないは君の勝手だよ。・・・ただ、イレギュラーな存在をそのままにしておくことを『神様』は許さない。一度その器の役目を終わらせ、もう一度転生させてみるか、それとも・・・。」

「

一瞬、アトウラの眼孔が鋭く光る。俺は、身の気がよだつほど恐怖を感じ、椅子から一步引き、懐の拳銃を構える。

「それはつまり、俺を殺すということか。」

構えたまま、問う。

「・・・ふふ、今、僕のことを『恐れ』たね？どうやら神が君達に備えた機能は正常に働いているみたいだ。・・・安心して、僕は君を殺したりしない。というか、出来ないんだ。そういう風に神が造つたからね、僕のことを。僕たちは、基本的には君達に関わることが出来ない。君達の生や死については特に、ね。」

トリガーに力を込める。

「それも、信じろと？」

いつでも撃てる態勢を維持する。

「嘘だと思うなら、その、『人の造りし刃』で僕を撃ち抜いてみなよ。」

言われなくとも。

俺はトリガーを引いた。

乾いた銃声が響く

第八幕 神話

- 8 -

「 . . . 」

俺の放つた弾丸は、彼の眉間に貫いた。そして、それは水中に吸い込まれるが如く 消えた。

確かに俺はアトウラの眉間に狙つて撃つたはず。そして弾丸はそこに命中したはずなのに・・・彼は更に続ける。

「 . . . 解つたかい？ 君は僕を傷付けることが絶対に出来ない。同じように、僕も君を、君達を傷付けることは絶対に出来ない。あつてはならないんだよ、君達と損得を分け隔てることが。それが、僕を生み出した神の意思つてわけ。」

「 . . . 貴様は・・・何者だ・・・？」

「理解したと受け取つていいいのかな？・・・そうだね、僕は、君達が言うところの・・・『審判』いや、『裁判者』と言つたほうが正しいか。だからこそ、僕はこの世界に於いて常にいかなるものより中立でなければならない。それこそが、神様が定めたルールなのさ。」

「

「 . . . 良く分からんが、つまり貴様は俺をどうするつもりだ？」

「別にどうもしないわ。長い長い歴史の中で、神様にさえ予期出来ない事態だって無いとは言えないんだもの。僕は、ただ君にそれを説明しなきやいけなかつただけ。更なるアンバランスを防ぐ為にね。」

あとは・・・そう好奇心かな。君の魂はどちらかと言うと僕たちに近い。・・・兄弟、いや従兄弟かな？君とお話がしてみたかっただけ。それに・・・」

と彼は言いかけて考え直す。

「・・・いや、それは後にしよう。君の質問に対する答えはここまでだよ。・・・他に何か聞きたいことはあるかい？」

「・・・神様つて奴は何のために俺達人間を造った？」

「君達らしい実に素直な疑問だ。・・・今まで幾多の人間がそれを求めた。いや、全ての人間達の根底にあると言つてもいい疑問だね、それは。」

彼は、大分温くなつたハーブティーを口に入れ、続ける。

「・・・でもね、その大いなる意思に、『理由』なんてないんだ。簡単に言つと、気まぐれ、というほうが解りやすいのかな。だから例えば君達が一人残らず滅亡したとしても、神様は何も言わないさ。それも一つの『結果』だからね。」

「・・・要は造りっぱなしで放置つてことか。随分と無責任な神様なんだな。」

俺が皮肉を洩らす。

「あはは、そういうわけでもないんだけどね。我らの神が、何をモチーフに僕たちを造り賜れたと思う？・・・神、自身さ。大いなる神は、自らの魂を幾つかに分け、始まりの子らと、七つの裁定者の

魂を造り賜れた。或る者は獸の姿、或る者は草木の姿、或る者は魚の姿、そして或る者は君達のようなヒトの姿にね。この地球上に存在する全ての生命は、神そのものと言つても過言じやない。神を模して造られた、言わば『神の分身』なのだから。」

・・・神論や進化論に興味は無い。俺は、自分の探しているものと、この曖昧な記憶がはつきりしさえすればいい。

「それで、俺の記憶はいつ戻るんだ？」

「言つたでしょ？僕たちは基本的には君達に介入することは出来ないと。君の記憶がいつ戻るかなんて、僕には分からなさい。」

それでは、俺は何のためにわざわざここに来たというのだ。肝心な部分が分からなければ意味がないではないか。
俺は、アトウラを睨みつける。

「そんな怖い顔をしないでよ。話は最後まで聞いて。・・・確かに、君の記憶がいつ戻るかなんて僕には分かるわけがない。でも、僕だって仮にも『裁定者』だよ？・・・君が転生する前、元の躰で生きていた時の姿はちゃんと観ていたさ。君は確かに何かを探していた。裁定者の僕には解らないけれど、それは君にとってとても大切で、かけがえの無い何かには違いない。そして、君はこの街に居た。これだけ分かればどうにか手掛りになるんじゃないかな？」

俺はその言葉を聞いて、とりあえずは安心した。この胸の中にある曖昧な記憶が少なくとも的外れなものではないと解ったからだ。

「探しているのは何なのかは分からないのか？」

「残念だけど、そこまでは……でも乗り掛かった船だ。出来る限りは力になるよ。ついでと言つてはなんだけど……僕の条件をのんでもいい代わりにね。」

「交換条件、ってわけか。」

「安心して、それほど難しいことじゃなによ。まず一つ、このテスタロッサのことは口外しないこと。まあ、普通の人間には僕の姿は見えないし、このテスタロッサにすらたどり着くことは出来ないんだけどね。」

「いじつはいいのか？」

俺は、隣で呆然と話を聞いている少年を指差す。

「え・・・・つあ、あたしは・・・・・・。」

「ん?今、自分のことを・・・もしかして、こいつは?」

「そう、もう一つがそれだ。普通の人間にはたどり着けないはずのテスタロッサ、更には見えないはずの僕の姿が見えている。……魂つてね、関わりの深い魂同士は互いにひかれあうんだ。だから、この子の場合もきっと君と近い位置・・・もしくは、遠い昔にお互い関わり合いのあつた魂を持っているのかもしれない。・・・失礼ながらお嬢さん、今までの話は聞いていたよね?僕は君のこともずっと観ていた。行く宛てが無いのなら、この無愛想な男についてゆくといい。無愛想だが、悪い男じゃない。この『裁定者』、アトウラが保証するよ。」

お嬢・・・つて、やはり女だったのか・・・つて。

「ちょっと待て! 無愛想も余計なお世話だが、つこで行かとせどり
いひじだー大体勝手に・・・。」

「おやおや、『袖擦り合ひ多生の縁』、とこづ言葉を知らないの
かい? 君が助けたことも何かの縁だ。どうせなら最後まで責任を持
つてみよ。」

「それとこれは別の話だ! 大体が、俺は場合によつては危険な目
に合ひかもしないんだぞ! ? それに、男ならともかくこいつは女
だ! それを簡単に・・・。」

「だからこそ、だよ。原因は解らないとはいって、君は僕にとつても
イレギュラーな存在だ。とても興味深い。生まれ落ちてから永久の
時を生きてきた僕ですら、君のような存在は初めてなんだよ。簡単
に死んで欲しくない。彼女が一緒なら、君も無茶は出来ないだろ。・
・ それに、女性を守るのは男の役目だ。君も男なら覚悟を決めな
よ。これは『条件』だよ。君にとつても悪くない話だと思つけどね。」

「

いけしゃしゃーとこいつは・・・。

「・・・。」

「あ・・・。」

少年・・・もとい、少女と眼が合ひ。少女はおずおずといひひを伺
つている。

・ ・ ・ そうだ、俺はともかく、この娘の意思はどうなんだ?

「・・・異論はないみたいだね？お嬢さん、君はびりつい？」

「え・・・あ、あたしはその・・・つ・・・。」

「そうだ、こんな若い娘が、何処の馬の骨とも知れぬ男と行動するなんて嫌に決まっている。」

「その・・・あのっ・・・か、彼が良ければ・・・。」

「ああ、そうだ、そりや断るだらう・・・ってー？」

「・・・お前、本気か？」

「え・・・？」

「よし！互いに異論がないなら決まりだ。そうと決まれば、後は若い一人に任せるよ。何かあればいつでもこのテスタロッサに来ればいい。僕はいつでもここに居るから。」

な、なんでこんなこと・・・。

「そうして、俺と、この無防備な少女との生活が始まった。・・・この先、一体どうなることか・・・。」

第九幕 記憶

・・・不完全なる魂の記録。奏でる旋律こそが生きとし生ける者たちをより美しく魅せるのか。

我等が偉大なる神、 × （音読不能、以後クウルトゥルと表記）の造り賜れた世界は、更にはそれ以上の全てを産み出すきっかけとなつた。

先ず賜れたのは自らの魂の分かち身。始まりの子、クリアト。次にファロミコ、エイセレト、ティセリイス。二十七の始まりの子を賜れた後、最後に賜れた二十八番目の子、アトウモス。始まりにして、終末の子。

アトウモスを産み出した後、クウルトゥルは自らの肉体を七つに裂き、それを個々として創造する。

アストアラト、アトウラクナクア、エゼブブ、イアクグア、イエヴ、アプホウス、グアタノトゥア。

神の肉より出でし彼等を裁定者と名付け、全ての愛すべき子たちの礎となるよう、命じる。

七つの裁定者達に課せられた使命は三つ。一つは魂の誘導。一つは永遠の観測。そして一つは、終末の子、アトウモスの幽閉、監視。始まりにして終末を司る、忌むべき子、アトウモス。神は自ら造り賜れた世界を失うことを恐れ、彼を幽閉し、来るべき時が来るまで封印するとした。

或る旧きものは、クウルトゥルの行為を嘲った。或る旧きものは、彼等の行為をとても興味深いものとして觀ていた。

同じく旧きものであるクウルトゥル自身もまた自らを嘲り、忌み嫌つたが、その忌むべきものを大いなる愛と呼び、その言葉を最後に、彼もまた永き眠りにつく。

(新説クワルトウル神話 第二章より)

第十幕 戸惑い

- 10 -

一体何故こんなことになつてしまつたのか。

俺は、テスタロッサを後にし、アパートに戻つてきついた。成り行き上、途中で助けてしまつた少年　いや、正しくは少女だったのだが　も一緒にだ。ベッドに腰かけて、何度も考える。

『一体何故こんなことになつてしまつたのか』。

少女は、部屋の扉の横に立つて、やはりおずおずとひざを向つてゐる。

びひひひひ。

アトウのせいだ。しかしあとと言えば、俺の田の前で逃走劇を繰り広げたこいつも悪い。といつゝことは・・・元を正せばあのチンピラ二人組が悪い・・・手足の一本か三本でもバラバラにして出来の悪い顔を更には化け物顔にするべりとしてやつやよかつた・・・。

・・ん? そう言へば・・・。

「・・・おー、お前。」

「えつー・は、はこつー・ー。」

いきなり呼ばれ、躊躇したかのような反応の少女。

「やつ言へば、なんでお前あんなチンピリに追つ掛けられてたんだ?
?」

「あ・・・いやその・・・あのですね・・・。」

少女は口籠ると、躊躇いながらも、話し出す。
要約すると、こうだ。

路地を歩いていると、怖そうな一人組に呼びとめられた。金を要求してきたので断ると、凄まれたので謝りつつして思いつきり頭を下げるが、スキンヘッドの男の股間に直撃。以下略。
とこりこりじらしこ。

「そ、そんなつもりはなかつたんですけど、その・・・なんという
か・・・。」

尚も申し訳なわけに言ひ切しようとする少女を見て、思わず俺は・
・

「・・・・・ふつ・・・・。」

「えつ?」

「く・・・くつくつ・・・・あつまつまははー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!

思わず、吹き出しちゃっていた。少女は何事か解らず、ぽかんと
している。

「あ、あの #12316;・・・・。」

股間に頭突きを喰らいながら悶絶するスキンヘッドを想像すると、笑いが止まらなかつた。その後、俺にまで投げ飛ばされたんだからスキンヘッドも災難だつたる。もしかしたらまだ頭を茹で蛸のよ

「うにして探し回つてゐるんぢやなかうつか。

「くつはは・・・す、すまん、余りにおかしかつたんで、つい、な。しかし股間に頭突きか・・・ふつくはは・・・。」

「ひ、酷いです！結構必死だつたんですよー。」

少女が、顔を真つ赤にして泣きそつた顔で怒る素振りをする。俺は必死で笑いを堪えながら謝る。

「す、すまん・・・いやしかし、そいつも相当災難だつたな。」

「はー・・・悪いことをしちゃいました・・・。きちんと謝りたかったんですけど、怖い顔で襲つてくるんで、つい逃げちやつて・・・。」

「いや、お前は悪くなつた。気にするな、スキンヘッドの商業自得だからな。」

「・・・わうなんですか？」

「ああやうだ。・・・といひで、お前、名前は？」

「え・・・あ、あたし、イリシアって言こますー！イリシア＝ケルフア！」

「やうが、イリシア。お前、なんでそんな変装みたいな格好を？ぱつと見、男の子みたいだぞ。」

実際、テスタークサで知るまで、少年だとばかり思つていた。

「えっと・・・そのほうが危なくないからって聞いて・・・あの・・・あたし施設から・・・その、抜け出して・・・きたんですね。」

「施設？」

「はい。・・・あたし、孤児だつたんです。両親の顔は知らないですけど・・・聞いた話だと、忌み子だからと・・・。」

「咲ちゃん……どうした……。」

「どうこう」とだと言おうとしたとき、イリシアが、ずっと被つたまま
まだった帽子を取った。

大きな瞳。端正な顔立ち。こうして見ると、なかなかに美しい少女だった。だが、瞳を良く見て、気が付いた。

「・・・オッド・アイか・・・。」

右田は空の色を映したような蒼。左田は、エメラルドのような、碧色をしていた。

「この両親のせいです……あたしは両親に捨てられたと聞きました。でも、一度いいから……一回、両親に会いたくて……。」

「成程、それで施設を飛び出してきたつてわけか。」

「はい・・・それでうるうらしていたら、後はさつき言った通りで・

•
•
•

「それならそれで、施設の先生とかに相談出来なかつたのか?」

「相談はしました。でも、先生達は『ダメだ』としか言わなくて……」

・。」

成程……そこまで預定されるといふことは、よっぽどな親か、それとももつ……。

「それであたし、施設を抜け出そうって決めたんです。会わせてくれないのなら、自力で会いに行く!って決めたんですが……。」

「宛てはあるのか?」

「いえ、それが……この世界の、何処かってことしか……。」

世界の何処か……。

この世界は余りに広すぎる。しかもイリシアの親が施設に預けに来たとすれば、結構な遠い場所にするはず。すぐに帰つてこれる場所では困るからだ。特に理由が貧困等でなく、『忌み子』だからなんて理由ならなおさらだ。

しかしこの時代に於いて『忌み子』だからなどと……時代錯誤甚だしい。確かに、地域や国、宗教などによつては未だにそういうた観念が残つている処も少なくはないが。

「それで、どうやって探すつもりだったんだ?手挂りはそれしかないんだろう?」

「あ……いえ、もう一つあります……れ……。」

イリシアは胸元から、ペンドントを取り出す。細かい金細工の入つ

た、高そうなペンダントだ。真ん中には、これもまた高そうな宝石まで入っている。

「施設に預けられる時に、母が渡してくれたネックレスだそうです。これが手掛けにならないかなって……。」

「確かに滅多にないほどの代物だが……お前、さつきのダウンタウンでこれを誰かに見せたりしなかつたらうな？」

「え？ あ、いや、まだ……。」

やはり見せて歩くつもりだったのか。

「……なら、これからは気を付けろ。こんなモノを見せて歩いたら、恐喝だけじゃ済まんぞ。下手したら命」と持つてかかる。」

「えっ！ そ、やうなんですかっ！ ？」

世間を知らないとはいって、余りに命知らずな行動だ。

「結論から言うとだ。……お前、施設へ帰れ。親を探すのなら、成人して社会に出てからでも出来るだろう。」

イリシアは一瞬びくっとした後、涙目になりながらも返してくれる。

「いっ、嫌ですっ！ 絶対に戻りません！ 何でもしますー！ ここに置いてください、お願ひしますっ！ ！」

必死で頭を下げる。

しかし……こんな世間知らずの面倒を見るほど俺も暇じゃない。

「ダメだ。・・・どうじてもと言つのなら、わたくしのテスター・ロッサにでも行け。あいつなら何か良い方法でも知ってるだろ。」

「・・・っ・・・。」

イリシアは、顔を下げたまま震えていた。しばらくした後、口を開く。

「・・・どうしても・・・ダメ・・・ですか・・・?」

俺は、何も言わない。

「・・・・・・・。」

沈黙が続いた後、再度口を開いたのはイリシアだった。

「・・・分かりました・・・。一人でも・・・探してみせます。・・・助けてくれて、ありがとうございました。」

うつ向いたまま、帽子を被る。
ドアの閉まる音がする。

・・・これでいい。そのうち、諦めて施設に戻るだろう。

俺は、胸ポケットから煙草を取り出して、フィルターを噛みながら火を点ける。しばりく、ぱおっとしたまま、煙を吸い込む。外はすでに真っ暗だ。懐中時計を取り出して時刻を見ると、すでに二十時を回っていた。

俺は、何も考えないようとする。

そういえば、あのチンピラどもはびうしだろう。さすがにまだ探し回っているということは無いだろ？が・・・。

考えないようにするはずの、嫌な予感がする。しかし俺には関係のないことだ。

・・・今日はもう、寝るか・・・。

少し早いが、今日は余りに色々なことがあった。

部屋の灯りを消してベッドに転がる。

・・・明日がくれば。明日がくれば、また俺は探さなきゃならない。
自分自身の記憶を。大丈夫さ。不安なんて何もない。言い聞かせながら、闇の中に墮ちていった。

第十一幕 岸壁

- 11 -

トボトボと、もう真っ暗になってしまった街を歩いていた。
元々一人で頑張ろうと思つていたんだから。大丈夫、なんとかなる。

あたしは胸のペンダントを握り締めると、一人きりでそう呟く。
何故か、涙が出た。だけど悲しくない。悲しくなんか、ない。
あとの人の言つ通り、あそこへ行こう。『テスタロッサ』へ。調べて
もらえば分かるはず。だって、あたしのことだつて見てたつて言つ
てたもんね。パパとママのことだつて、きっと分かる。うん、そう
しよう。

涙を拭つて、帽子を更に深く被り直す。

もう一度、あの街へ一人で行くのは気が少し引けたけど、仕方ない。
自分のことだもの。他人に頼るのは間違つてる。・・・元々そう考
えて施設を出てきたんだから、後悔はしない。・・・後悔なんてし
ないはず・・・なのに。

なんでだろう。また涙が込み上げてきた。

目が霞んで、視界が悪い。あたしはふらふらしながら、あの街へ向
かっていた。

ドンッ

誰かにぶつかつて、少しよろめく。

「あつ・・・」、「めんなさいっ！」

頭を思いつきり下げる。相手の顔は見えない。反応が無いので、あたしは顔を上げる。

「 あっ！」

思わず、声をあげてしまった。

「・・・見つけたぞ、クソガキいい & amp; #12316・！
！・！」

あの時の、髪の毛の無い人だ。あたしは、その怖い顔に驚いて、また逃げだした。 が。その瞬間、後ろに居た人に腕を捕まれた。

「 今度は逃がさねえぞお・・・。」

後ろにいたのは、もう一人の、装飾品をいっぴつけた細身の男の人だった。

「クソガキが、散々探したぜえ・・・手間あ取らせやがつてつ！
！」

路地の裏に引きずり込まれ、壁に叩きつけられる。

「 つーーー・・・。」

背中を強く打つて、口の中に鉄の味が広がる。息が詰まつて、一瞬呼吸が出来なくなつた。

「うう うくはあ！……げほっ！げほっ！」

苦しくなって、吐いてしまう。丸一日何も食べてなかつたから、胃液しか出ない。口の中が、鉄の味と胃液の苦い味で、もう散々だつた。

「一緒に居た野郎はどう行つた？あの野郎もぶんぬぐりねえと気が済まねえつ！！」

頭をつかんで、軽々と持ち上げられる。次の瞬間、ふうっと躰が浮いて、もう一度投げ飛ばされた。

今度は、後ろにあつたゴミ箱がクツショソになつて、それほど衝撃はなかつたけれど、生ゴミの強い臭いで躰中がびしょびしょだ。

あたしはなんとか起き上がる。

「つ・・・はあ・・・はあ・・・あ、あの人は・・・関係・・・ないです・・・。」

「あああっ！？？」

「 つおい待て、こいつ 。」

スキンヘッドの男の人があたしを見て口を開けている。つ！？しまつた、さつきの衝撃で帽子が 。

「 おいおい、こいつ女だったのかよ。」

「 しかもこいつあ・・・へつへつ、大したもんじゃねえか・・・。」

スキンヘッドの男が、舌を出しながらゆっくりと近付いてくる。

怖い。

心からの恐怖を感じて、逃げようとしたけれど、躰を強く打つたせいで思うように動けない。尚も男はゆっくりと近づく。

「くつくつく・・・最初からそういう言やあいこのによお・・・女だつて分かつてりやあ、こんな手荒な真似しなかつたんだ・・・」

スキンヘッドの、荒々しい掌が、あたしの腕を掴む。

「こやつ！ やめて・・・べだせ・・・。」

あたしには、懇願することしか出来なかつた。

腕を掴んだまま、顎を無理矢理挙げさせられる。恐怖と痛みで視界が定まらないが、多分涙も流しているんだろう。急に自分で自分が情けなくなつた。

あの人の言う通り、おとなしく施設に戻つていればこんなことにはならなかつたのに。

「うくく・・・いい顔してくれるじゃねえかあ・・・俺あな、そついつの好きだぜえ？」

下品な声が脳に響く。次の瞬間、胸元の服を引き裂かれた。

「こやあああ……やだ・・・やだめやめてえ・・・っ！」

それでもあたしは必死で懇願する」としか出来ない。不意に、男の興味が別に向く。

「・・・ん? なんだあこのペンドントは・・・。嬢ちゃん、いいもん持つてんじやねえか。こりや売り飛ばしゃあ結構な値がつくぜ・・・?
・?」

男の掌が、胸元のペンドントに掛る。

ママのくれたペンドント。両親の唯一の手掛け。

瞬間、あたしは最後の力を振り絞り、男の掌からペンドントを奪い返す。

「 ってえな、なにしやがんだこのアマああつつ―――」

男が、大きく右手をふりかぶる。あたしは、来るべき衝撃を覚悟し、目を固く瞑った。

第十一幕 壊倒

- 12 -

・・・・・

ほんの、数秒間のことだと思う。

あたしは、衝撃を覚悟して目を瞑っていた。

・・・しかし、いつまで経つても男の振り上げた右手は降りてこない。代わりに、男の驚いたような声が、耳に入ってきた。

「 てつ・・・テメエ つ！…」

その次の瞬間、あたしはスキンヘッドの重い腕から解放された。

恐る恐る、瞳を開けると、眼に映ったのは居るはずのない、あの人だつた。

「 つ…！」

スキンヘッドの躰が、物凄い勢いで地面に叩き付けられる。男は何かを言おうとしたけれど、それが言葉になるよりも早く、男の躰はもう一度彼の拳によつて地面にめり込み、言葉になるはずだつたものは、悲痛のうめき声にしかならなかつた。

彼の拳が、一度、二度、三度と男の顔面に叩き付けられる。その度に、骨が割れるよつた、何かを擦り潰すような音が辺りに響く。

「ひつ！ひいい！…」

派手な男は、傍らで腰を抜かしたかのよつて座り込んで、目の前の壮絶な暴力に気圧されていた。

「があつ ぐあつ わ・・・わるつ・・・。」

殴られている男が何かを言おうとしているけれど、構わずには叩きつけられる両方の拳。時間にしてほんの一分、いや数十秒のことだったかもしない。突然、彼の動きが止まる。

待っていたばかりに、スキンヘッドの男が言葉に出来なかつた何かを、息も絶え絶えで言葉にする。

「 おつ・・・俺がわる・・・悪かつたあ・・・もう、も、勘弁してくれえ・・・。」

かすれそうな、涙混じりの声だ。しかし、彼はそんな言葉は微塵も気にせず、長いコートの懷から何かを取り出して、男の額に突き付ける。

それは、テスタークロッサでの緋色の髪の少年を撃つた、黒い鉄の塊。

少年が言つた、『人の造りし刃』。

それは、拳銃だった。

男も、ソレに気付いたようだ。必死で懇願する。

「や やめてくれえっ！…いのつ、命だけは、どうか、どうか
あつ！」

足をバタつかせて必死で抵抗するが、馬乗りになつた彼の左腕につかり捕まえられていて身動きが取れない。男はまるで気が狂つた

かのよつて命にこし、懇願する。そしてやつと、彼が口を開く。

「・・・汚い血と脳髄で汚れたくなけりや、どこでろ。」

それは、傍らで腰を抜かしていた派手な男への言葉だった。派手な男は、奇声を上げて転びながら逃げてゆく。まるで、悪夢でも見たかのよつて。

本当に殺す気だ。

あたしは、動かない躰を必死で彼のほうへ進める。声がなかなか出ない。

「だ・・・だめ・・・。」

あたしの為に、彼を人殺しになんてしちゃ駄目だ。あたしは、必死で彼にやめてと告げよつとするが、さつきのショックか、声にならない。

彼の指が、引き金をゆっくりと絞める。

男は、足をぴくぴくとしながら、か細い声で尚も哀願する。彼が最後の言葉を発する。

「・・・死ね。」

次の瞬間、暗闇に耳をつんざくような銃声が響きわたっていた。

第十三幕 安堵

- 13 -

銃声に驚き、カラス鳥が飛び立つ。

俺の放った弾丸は、スキンヘッドの汚い頭をかすめ、数センチほど
の弾痕を残して何処かに消えていた。

スキンヘッドはそれまでの痛みと銃声のショックで、白眼を剥いて、
口から泡を吐いていた。

これだけの目に遭えば、一度と俺たちに近付くまい。俺は、男から
離れると、イリシアのほうに近づく。

「大丈夫か？」

イリシアは大きく眼を見開いている。

「！」・・・殺しちゃったんです・・・か？

泣きそうな顔をして男と俺を見比べるイリシア。

・・・こんな目に遇つても他人を心配するのか、この娘は。

「・・・脅しただけだ。今は氣を失つてるがな。当分起きんだろ？」

「

俺の言葉を聞いて、一瞬安堵を洩らす。

だが、次の瞬間、一気に表情が歪む。

「……………つーつー。」

「おー、どうした！？何処か痛むのかつ！？」

イリシアは、ぶんぶんと首を振ると、俺の腕にしがみつき、大声で泣きじやくつっていた。

緊張が取れた安心感からだらう。俺は、背中をさすりながら、しばらくの間、腕の中のイリシアを見守つていた。
しばらくすると、安心したのだろう。イリシアは俺の腕の中で、すうすうと寝息を立て始めた。

「……………やれやれ……………。」

俺は、イリシアにコートを着せた後、背負つて、路地裏を後にする。

とつあえずは、戻るしかあるまい。

そつ考えた俺はアパートへの岐路についた。

第十四幕 信頼

- 14 -

・・・気が付くと、あたしは彼の背中に居た。大きな背中。暖かいと感じたのは、彼の黒いコートをあたしが着込んでいたからだろうか。

「あ・・・あのっ、いははは・・・つづう」

彼に話しかけようとして、全身に痛みが走る。
どうして・・・?なんであたしは彼の背中に・・・あれ?どうした
んだろう?この躰の痛みは。
あたしは、記憶を遡るつとする。

「・・・起きたか。無理をするな。大分酷くやられたな。痣だらけ
だぞ。」

・・・そうか、あたし、あのまま氣を失つて　。

「え・・・えと、助けてくれた・・・んですよね?」

我ながら間抜けな問いだとは思つたけれど、余り記憶がはつきりしない。

「・・・まあ、元はと言えば俺が中途半端に扱つたせいもあるから
な。連中のよきな輩は徹底的にやらんとある。しつこいんだ、
ゴキブリ並にな。」

彼が、冗談っぽく言つ。……こんな優しい喋り方もできる人なんだ。

正直、アトウラさんの言つ通り、無愛想な人なんだと思つてた。

「だが、間に合つて良かった。すまん、あんなことになるのなら、せめて一晩くらいは泊めてやればよかつたな。」

彼の言葉で、記憶が段々はつきりしてきた。男たちに乱暴されそうになつて、もう駄目だつて思つたら、彼が居て……。
もし、彼が来てくれなかつたらと思うと身震いするほどゾッとする。
……でも、その恐怖は、彼の背中の暖かさですぐ洗い流されてゆく。

「躰は……どうだ？ 痛いか？」

彼が、気遣つてくれる。本当は全身がバラバラになりそなくらい痛かつたけれど、あたしは敢えて、大丈夫です、とだけ答えた。すると彼は、しばらく沈黙した後、話し出す。

「……はつきり言つとく。お前の両親な、もしかしたら、もうこの世には居ないかもしれん。もし生きていたとしても、手掛けがほとんどないんだ、いつ見付かるかも分からん。」

彼が、淡々と話す。

「はい……あたしも、それは分かつてます……。」

もしかしたら、すでに亡くなつてゐる。……何度も考えたことだ。それでもあたしは……。

不意に、彼がふふっと笑った。そして言葉を続ける。

「それでも・・・お前は引かないんだろうな。何せ、お前は言い出したら聞かない。」

「はい・・・生きている可能性が少しでもあるのなら・・・いえ、もし亡くなっていたとしても・・・それでも探したい。お墓に祈るだけでもいいんです。一回・・・会いたい・・・」

彼の背中に捕まつた手に、ぎゅっと力が入る。

「・・・俺も、自分の記憶を探したい。何か大切なものが・・・この胸の中にあるんだ。俺は、探さなきゃならない。」

あたしは何も言わず、彼の言葉ひとつひとつに耳を傾ける。

「もしかしたら、今日よつずっと危険なこともあるかもしねれない。・
・それでも・・・」

彼は、少し戸惑つた様子で、続ける。彼の言葉と、思いと、優しさの一つ一つを噛み締めていると、あたしは何故か、涙を流していた。

「それでもいいのなら・・・俺と一緒に、行くか・・・？」

涙に堪えながら、あたしは、言葉を絞り出す。

「・・・はいっ・・・。」

彼の背中がとても優しくて、あたしは、夢中でじがみついていた。

この背中・・・彼になら、安心してついて行ける。どれだけ危険なことでも、彼とならきっと乗り越えて行ける。あたしは、細やかな幸せを、ずっと離したくないと願っていた。

第十五幕 裁定者と傍観者

- 15 -

「どうやら、若い二人はなんとか上手くやれそうだね。」

緋色の髪の少年は、一人咳いて見せた。その全てを映す、碧い眼は、二人の様子を興味深そうに見守る。

長く、全ての生物、全ての生命を見守つてきた『裁定者』たる彼は、それでもこの二人のことをとても楽しそうに見つめていた。

「楽しそうじゃないか、アトウラクナクア。」

誰も訪れるはずの無いこの部屋の一室に、少年を忌まわしき田舎名で呼ぶ者が突然に現れる。

「・・・なんだ、君か。何か用?」

少年は眼に向けることすらせずに、『氣だるやうな態度』を取つて見せる。

「『挨拶だなあ。せつかく君に良いことを教えてあげよ』と思つたのに。君の見つけた彼等の様子はどうだい?」

「別に、何も変わってやしないさ。彼等はすでに『大になる母』の手を離れた。僕に出来ることとは、見守るくらいだからね。」

突然の訪問者は、自嘲するかのように肩をすくめると少年を諭すよ

「ついでに」。

「まだ『あのこと』を根に持つてゐるのかい？言つただろう。アレに
関しては私は何も関与してないつて。むしろ私のほうが彼らに腹を
立てたくらいだからね。何せ彼らは『旧き盟約』をなんとも思つち
やいない。・・・長く生き過ぎただよ。今じゃ彼らは何よりも愚
かさ。」

「はつ、どうだか。そんなことを言つながら、君だつて彼らと同じじ
やないか。」

尚も少年は来訪者に食つて掛る。

「あの時・・・『ルルイエの審判』の時、君が取つた行動を忘れた
とは言わせないよ、ナイアラ。いや・・・ナイアルラトホテップ！
！」

少年がナイアルラトホテップと呼んだ、隻眼の女の姿をした来訪者は、悪びれもせず言い返す。

「・・・だから何度も説明しただらう。あの時はああするしか方法
がなかつたんだ。君の、いや君達の母、『クウルトル』が残した
この大いなる遺産、この世界の形を留めておくにはね。」

「・・・そのせいでも多くの兄弟達が無に還つた。長い年月を掛けて
集めた『記憶』も、半分以上が消え去つてしまつたんだ。」

少年は歯を噛み締める。

「・・・。」

隻眼の女は、何も言わない。ただ少年だけが、沈黙の中で悔しさを噛み締めていた。

「……『旧きものども』が再び『い』めき出した。今日はそれを君に伝えに来た。」

「 つ！」

今度ばかりは、アトウラも反応した。・・・あの、悲劇がまた、繰り返されようとしているのかと。少年は、ナイアルラトホテップナイアラを深く見据えて、再び沈黙の中へ。そして口を開いたのはやはりナイアラのほうだった。

「・・・ははっ、全く、無駄に年ばかり費やした老人どもは嫌になるよ。・・・もうすでに『旧き盟約』など彼らの退化してしまった『記憶』の中には微塵も無いんだろ。・・・そういうことを恐れたのかもしれないな、クカルトゥルは。」

「・・・自分は違つとでも言いたげだな、君は。」

「さて、どうかな？」

ナイアラは更に自嘲すると、続ける。

「『旧きものども』は、今回は『アトウモス』を用意させようとしている。ゲームが何かと勘違いしているんだあのジジイどもは。・・まあ、元々『旧きものども』の行動に『理由』なんてないんだつけね？君の持論では。」

「・・・ああ、同じ」と。『ルルイ』を呼び出すのも、『アトウモス』の封印を解くのも、やろうとしていることは全て同じ。・・・要するに、彼らは『クカルトゥル』のしたこと全てが気に入らないだけさ。」

「ははっ！・・・そうかもしないね。で？・・・君はどう出るつもりなんだい？」

アトウラはしづらく述べる。『アトウモス』。この名前は良く識っている。我らが母、『クカルトゥル』が、最期に産んだ『始まりの子』。忌むべき存在。そして同時に、同じように大いなる母の永久の愛を受けて産まれた、愛すべき兄弟。『クカルトゥル』は彼の者を幽閉して、我々七体の『裁定者』の監視の下に置いた。

・・・事実は識らない。それを大いなる神は我らに告げなかつたら。ただ、『始まりにして終末の子』とだけ聞いている。・・・彼の者が目覚める時こそ、この世界の終局だと。

「・・・今度は必ず、食い止めてみせや。」

アトウラは一言だけ、そう告げた。

ナイアラは口の端に笑みを浮かべ、君なつて答えると思つた、とだけ発した。

その後は、識るべき処ではない。

- 16 -

結局、俺達二人はアパートに戻っていた。

イリシアをシャワールームへやり、俺は、替えの服を探す。

・・・衣物の衣服などあるわけが無い。あつたらあつたで色々と問題もあるが。なんとか、俺のシャツの替えを見つけ、それで代用してもらうことにした。

・・・問題は、下着である。これもまた、俺の部屋にあつたとしても色々と問題だ。この躰の主の趣味までは知らないが、少なくとも俺にはそんな趣味はない。

色々と考えた結果、俺は仕方なく、近くのコンビニエンスストアに行くことにした。

近頃は便利になった。時刻は二十一時を過ぎようとしていたが、街道に出たすぐにあるコンビニエンスストアは何時でも開いていた。俺は店に入り、衣物の下着を手に取る。

・・・待て、ちょっとこの絵は問題あるんじゃないかな？

俺は、衣物の下着や小物が置いてあるコーナーで、手を伸ばしたまましばらく固まってしまった。

はっと我に返ると、店員の女がこちらを見ながらクスクスと笑っていた・・・よろしくなって、店内にあつたバスケットを手に取ると、下着を入れ、上からパンや飲み物を詰める。湿布薬なども売っていたのでついでに入れた。後は何を買ったか覚えていない。

レジで会計を済ませている最中、俺はどんな顔をしていただろうか。

・・・明日はとりあえずイリシアを連れて買い物に行こう、自分で必要な物を全部揃えてもらおうと決めた。こんな思いは一度とした

くない。

アパートに戻ると、イリシアがシャワールームから出ていた。

「あ・・・何処に行つてたんですか？」

俺は、買い物に出ていたことを告げる。そして、コンビニの袋を手渡すと、イリシアは中身を見て、真っ赤になつた。

「い・・・いじれつて　　つー」

「・・・・眞つな、それ以上は！」

「・・・・は・・・・はい・・・・。」

多分、二人して眞っ赤になつていたのだらう。しばらく沈黙が続く。

・・・・そういえば、俺のシャツを着ているが・・・・その下はどうしたんだらう・・・・と、一瞬考えて彼女と目が合つたが、イリシアはまた顔を眞っ赤にして一言言つ。

「え、えと・・・・じゃ、じゃあ着けて来ますねつー！」

そのまま、再度シャワールームに逃げ込むよつにして入る。

・・・・・いや、これ以上考えるのはよそう。精神衛生上、良くない・・・・。

俺は、コンビニで買った缶ビールを出して、一口飲む。・・・・そういえば、今日一日何も食つてなかつたな。

袋から、サンドウイッチを出して頬張る。そして缶ビールで流し込むと、空っぽの胃に染みた。

しばらくして、イリシアがシャワールームから出てきた。・・・・い

や、シャツの下が、下着だけなのほこの際無視しちゃう。・・・無視
だ無視！

「あつ・・・えと、着けてきましたっ！」

「こちいち報告せんでいいっ！――」

「あは、あははは・・・。」

・・・わざとやつてるんじやないだらうなこいつ・・・。

俺は、イリシアに食事を取りよつに獎める。

「あつ・・・実は、お腹ペコペコだったんですよ&a#12316;」
「316・。今日一日何も食べてなくて・・・。」

「・・・俺もだ。」

「どれ食べてもいいんですか？」

「ああ。俺は」こつだけで十分だ。後は全部お前が食え。」

「え・・・せ、全部ついて・・・これ全部・・・？」

袋の中には、パンやら何やら、かなりの数がまだ残っていた。

「・・・無理か？」

「無理ですよーーーも&a#12316;、なんでこんな
ここと。」

「……色々とあったんだ……。」

「はひ?」

「いや、いい。思い出したくない。」

「……?」

結局、イリシアはパンを一つとオレンジジュースだけ飲んで、残りは朝飯に充てることにした。

「あ、そうだ。あたし、その、貴方のこと、なんて呼べばいいですかね?」

「……やつこえば、まだ名前すら思い出してなかつた。俺は考える。……考えたが。

「……分からん。」

「あつ……記憶、無かつたんですね……。」

「アトウリに名前くらい聞いておけばよかつたな。」

確かに、名前が無いところのは不便だ。

「じゃ、とりあえず呼び方を考えましょー。」

イリシアの案で、しばらく禅問答が続く。

「う&#12316;ん、黒い服を着てたから、ブラック

さん？

「・・・安直過ぎやしないか?」

「え〜と、じゃあ、強いからスーパー！」

「漫画の見すぎだ。」

「えと、えと、じゃあ……。」

ちゅうと待て、お前真面目に考えてるか?」

「考へておあよお&a m o. #12316. じやあ. . . .

「却下だ。」

「お兄ちゃんっ！」

「変わつてないだろー！」

え！いいじゃないですか、あたし兄弟ほしかったし

却下た
…俺の趣味かと思われる

「でもでも、はたから見ると兄妹って言ったほうが違和感ないです
よ？」

「そういう問題じゃない。俺じゃなくて、俺の趣味だと疑われるん

だ。」「

「・・・?」

「・・・今、俺は何て言つた?」

「う& amp; #12316;ん、意味が解らなかつたです。」

「・・・だよな。」

多分、何処からかの心の声に違いない。

「う& amp; #12316;、じやあびうしましょう?」

「ふむ・・・。」

そのまま一時間くらい試行錯誤したが、結局は『兄さん』で決まつてしまつた。・・・何かの陰謀を感じる。

「えへへ& amp; #12316;、うーさん うーさん

「妙な歌を唄うな。」

「二二さん二二さん二二さん

「連呼するな。」

「・・・お兄ちやん?」

「埋めるわつ……」

・・・でも、居心地が悪い呼び方だ・・・。

「とにかく、呼び方も決まつたことだし良いじゃないですか」

「こまいち釈然とせんがな・・・。」

「細かこじとは氣にしないつ」

妙にこじ機嫌だな、こじつ・・・。

ん? そうこえはこじつ、歳はいくつだ? ・・・見たところ、まだ十代もそこそこのようだが・・・。

「おこイリシア、といふでお前はこくつなんだ?」

「え? あたしですか? 今年17になつたばかりですよ?」

・・・17?

・・・背はともかくこじつ・・・。

「・・・。」

「え? え? な、なんですか? ・・・はつー」

「い、いや、17には見えんなど・・・うがつー?」

「何処見て言つてんですか? ……」

「こ、いやめて、俺がわるかつ

つがあつ……」

「兄さんのヘンタイつ……」

「…………。」

イリシアの投げた中身入りの缶コーヒーが俺の顎に見事命中。……しばらくの間、脳を搖さぶられて意識を失っていた……。

「……もう、あたしはこれからなんですー。」

「だから、俺が悪かつたって言つてるだろ……。」

一気に機嫌を損ねてしまった。……女とこうのは、怖いな……。

結局その日は、夜中までこんな感じでワイワイとひやつていた。

始めはどうなることかと思ったが……いつのまでも悪くないと思
う自分が居て、内心、少し戸惑つた。

しかし、俺は記憶を取り戻さなければならない。そして、出来るこ
となライリシアも両親に会わせてやりたい。明日から、何をすべき
かを考えつつ、イリシアをベッドに寝かせ、俺は毛布にくるまり冷
たい床の上で眠りに墮ちて行った。

第十七幕 安息、決断

- 17 -

「う& amp; #12316; ……これもいいし、こっちも捨て
がたいよね……。」

かれこれ一時間。

イリシアは目の前の洋服と睨み合っていた。

「……どっちでもいいんじゃないかな？」

俺は正直、一刻も早くこの場を逃げ出したかった。

「あ& amp; #12316; んもうつ！ そんなこと云わずに兄さ
んも選んでくださいよお！」

イリシアが、二つの洋服を両手に持ち、躊躇させて見比べる。

・・・婦人服売り場においてこの状況は、世の男性なら羨ましがる輩も居るだろうが・・・はつきり言って俺には拷問以外の何者でもない。周囲の視線がとてもなく怖い。

「ね、ね、これはちょっと派手だと思つんですけど、ほら、こ
こ可愛いですよね……でもこっちのこれも可愛いなあ & amp;
#12316;。う& amp; #12316; ……兄さんはど
つちが好きですか？」

「……どっちでもいいんじゃないかな？」

俺はやはりそう答えることしか出来ない。

「 もうひー・・・・」& amp; #12316;ん、迷つなあ & amp; #123
p.;#12316;・・・・ どつちがいいかなあ & amp; #123

・・・このまま放つて置いたらもしゃ閉店まで掛つても決まらないんじゃなかろうか？

俺は物凄く嫌な予感がして、結局、両方買うよつに促した・・・。

「えへへ&#12316;・・・兄さん、ありがとうございます」

上機嫌のイリシア。

俺達は、午前のうちから買い物に出てきていた。

イリシアの生活に必要な物、その他、食料品や日用品なんかを揃える為だ。この躰の主はどういう生活をしていたのか知らないが、この街で手掛りを探す以上、あのアパートに長く滞在しなくてはいけない可能性のほうが高い。男の俺だけならまだしも、イリシアが一緒となると、あの部屋には余りにも物が少なすぎる。幸い、手持ちの金にも不自由が無かつた。

イリシアは意外にも家事全般には長けていた。それで、次から次へと買い物を済ませる。施設での生活はほとんど子供達が自分らで行い、家事は当番制、買い物なども順番で行っていたらしい。成程、言うだけあつて買い物にも無駄が無い。必要なものは全て最小限で揃えている感じだ。俺にはそこら辺の知識はあるでないので、イリシアに任せて正解だと思った。

しかし、婦人服売り場に来てからは様子が一変。あれよこれよと見

てこるうち、一向に止まる気配が無くなつて今に至るといつわけだ。一度は場を抜け出そうとしたが、イリシアの執拗な引き留めに遭つて断念。・・・さすがに下着売り場だけは昨日の悪夢が蘇つて断固拒否したが。

両手に持つた袋の上。サウスロタの街を大荷物を抱えて歩く男の様は、いつ見ても不憫だ。・・・まさか、自分がその状況に陥ることにならうとは思いもしなかつたが。

「・・・別に宅配でも良かつたんじゃないかな?」

俺が洩らす。

「駄目ですよ。この量になると宅配代も馬鹿にならないんですか。・・・さすがに冷蔵庫だけは兄さんに運んで貰つわけにもいかなかつたんですけど。」

・・・成程、金銭感覚にも優れているようだ。いい奥さんになれるなど言おうとしたがやめた。また増長しだすと今度は何処まで力を注ぐか分からぬ。

「・・・にしても、これだけの荷物、何処に置くつもりだ?」

「ちゃんと全部配置は考えてますよ #12316;」

イリシアは、二口一コとしながら俺の前を歩く。手にはこれまで買いたい物の入ったスーパーマーケットの袋を下げている。

・・・ということは、この後に待つてるのは・・・部屋の模様替え。いや、あれほど殺風景な部屋だ。模様替えというほど大それた

ものじやないだらうが。

今日は一日、イリシアに振り回されそつた予感がある。・・・こんなことをしていいる場合などだらうか・・・。俺は心の中で小さな溜め息を吐きつつ、イリシアの後を歩いていた。

「・・・これでよしひとー」

アパートに着いた後のイリシアの行動は、それはそれは迅速なものだった。殺風景な部屋に、次々と生活の匂いが降り注がれてゆく。出会った当初のイリシアの面影は無いと言つても過言ではないほど手際の良さ。・・・どうも、これがここでの本来の姿らしい。

「あー兄さんそれはそつちにてーえど、その荷物はなんでしたっけ?」

「・・・口口だな。」

「あ、じゃあそれはキッチン。でもキッチンとこいつはちよつと狭いなあ・・・。」

「仕方ないだらう、ワンルームなんだから。」

「それもそうですね・・・。じゃ、冷蔵庫はここに置くとして&#12316;・・・あ、そろそろお店の人来る頃ですよね?玄関片付けておかなきや。」

・・・と、まあこんなやりとりがしじまへ続い、やつと一段落した時、玄関のブザーが鳴った。

「ちわーつ、サウスロターパートでーす！」

イリシアが待ちに待つ冷蔵庫の登場だ。とはいえ、小さな冷蔵庫で、せいぜい一、二日分の食料品を入れるだけで満杯になりそうなほどだが。

「いいっすねー！新婚さんっすかー？お幸せにてーーー！」

・・・店員は、帰り際にとんでもない言葉を残して帰りやがった。イリシアは顔を真っ赤にしてしばくへつつ立っていたが、すぐに気を取り直して照れ笑いを浮かべつつ、作業の続きを没頭していた。
・・・どうにもペースを乱されっぱなし。しかしここにも悪くないと思う自分もいた。・・・複雑だ。

結局、全ての片付けが終わって落ち着いたのは、夕方も六時を回った頃だった。

「ふうつ。いろんなものですかねえ。でも個人的には花なんかも飾りたいなあ。」

「それはまた今度だ。もう六時だぞ。」

「あつ・・・もうそんな時間ですか？・・・えへへ、夢中になりますきて時間の経つのも忘れてました。」

「・・・よっぽど好きなんだな、ひつひつの。」

「せうこうわけじゃないんですけど&a m p; #12316・・・
なんていうか、憧れてたんですよ、ひつひつこと。」

「・・・部屋の「一デイナイトか？」

「違いますよ！・・・そだなあ、狭いながらも自分の家があつて、部屋にはこいつ、綺麗な花とか絵画が飾つてあつてえ〜・・・」
2316・・・・・。

イリシアは妄想の中で遠い目をしている。

「それでほんとは犬とか飼つたりして〜・・・あ、
・それで〜・・・その・・・と、隣には・・・
・。」

急にイリシアが口籠る。

「ん？」

「・・・え、えと、その〜・・・あ、
あははは！な、何でもないですっ！そだ！お腹空きませんか！？
あたし、何か作りますねっ！！」

「・・・突然そつぽを向いて冷蔵庫を漁り出すイリシア。

・・・なんだ？いきなり。・・・まあいいか。

確かに腹も減つていて。俺は夕飯の準備をしだしたイリシアを横目に見ながら、買い溜めしてきたカートンの煙草のパッケージを開けて、一個取り出すと残りをキャビンにしまう。キャビンの中を見て、思い出す。

・・・そういえば銃の手入れを忘れていたな。弾丸は確か・・・。
俺はキャビンの引き出しの奥からパラペラム弾の詰まつた箱を取り出す。

拳銃の安全装置を確認し、カートリッジを引き抜く。中に残つてい

た弾丸は十発。一発はアトウラの時。もう一発は例のチンピラを齧した時の一発だ。

俺は銃身を確認する。・・・煤が多少残つてはいたが、フレームの歪み等はないようだ。粗悪なものであれば、一、二発撃つだけでフレームに歪みが出たり、下手をすると輝が入つてしまつたりする場合もある。俺は軽く煤を落とすと、弾丸を一度全部抜いてから再度入れ直す。万が一のことも考えて、今度は一発だけにした。残りは外出する前に詰める。そうすることで、もしもこいつを身につけていない時に奪われた場合、相手の弾数を把握すると同時に最小限の被害に抑えられるからだ。・・・もっとも、今敵襲があつたとしたら、逆に一発だけの弾丸で太刀打ちしなければならなくなるが。少なくとも、その心配は今のところないだろ。もしもそんな事態であれば、今日一日外に出てる間になんらかのリアクションがあつて当然だからだ。

ただ、若干の心配が残るのはこの躰の元の主だ。・・・部屋の中には、この躰の主の身元を明かすような類のものは何も無かつた。そう、免許証などは勿論、通帳や保険証、請求書の類など、一切の記録が一つ残らず『無い』のである。・・・何故そうまく必要があつたのか。考えられるのは身元が割れでは困る職業・・・つまりは、CIAやその類などの特殊な任務を持つた公的機関の一兵。もう一つはテロリストや国家犯罪者の一兵のほうだが・・・どちらにしても、マークされている気配や殺氣を微塵も感じない所を見ると、どうやらやはり死んでいることになつていいらしい。事実、確かにこの躰の主は『死んでいる』に違ひないのだが。

やはり、記憶を取り戻さない限り、身の安全の保証はないらしい。問題は、それにイリシアを巻き込んでしまうことなのだが・・・。

「 『飯できましたよ & amp; - #12316 : !』

その時、キッチンに立っていたイリシアが陽気な声で夕飯の完成を

告げる。

「…………？」どうしたんです？難しい顔をして……。

「…………いや、なんでもない。」

当の本人は呑気なもんだ。……まあ、どちらにしてもなるよつてしかならないだろう。

兎に角は、もう一度『テスタロッサ』に行つてみよう。手掛けはやはりアトウラのみだ。これからのお予定を立てつつ、俺はイリシアが用意してくれた食事を楽しむことにした。

第十八幕 審判

- 18 -

イリシアが作つてくれた夕食を平らげ、俺は煙草に火を点ける。家事が得意だと言つだけあって、簡単な料理だが味はなかなかだ。

「・・・えと・・・お口に合いました・・・？」

イリシアが不安そうに尋ねてくる。

「ああ、美味かつた。」

「よかつたあ！・・・正直言つと不安だつたんです、兄さん、黙々と食べてるから。あ、あたし片付けてしまいますね。」

そういうとイリシアは二口二口と上機嫌でキッキンへ行く。イリシアの後姿を横目で見ながら、俺は時計を見る。
・・・時刻は八時半。まだテスタロッサへ向かう時間はあるだろ？
俺は、イリシアに外出する旨を伝える。

「えつー？ちよ、ちよっと待つてくださいあたしもすぐ　。」

「いや、もう時間が遅い。お前は留守番を頼む。あの街は少々治安が悪い。こんな時間に女連れて行くには危険だ。」

「で・・・でも・・・。」

イリシアは不安そうに俺を見ている。

「心配するな。そんなに遅くはなりんや。遅くなりそつなら先に寝といてくれ。」

「・・・はい・・・」

玄関で見送るイリシアを後に、俺はアパートを出る。

一回目のテスタロッサに着くには、それほど時間は掛からなかつた。

寂れた雰囲気、木製のぼろぼろの看板。古びれた扉を開けると、そこはやはり暗闇だった。扉を閉めると、暗闇の中に墮ちたような感覚。一度目ではあつたが、やはり慣れるものではない。

暗闇の中、声が響く。

「やあ、よく来たね。待つっていたよ。」

アトウラの声が響いた瞬間、辺りが明るくなる。蝋燭に火が点いたのだ。

奥のテーブルの前に、アトウラは居た。

「今日ははどうしたんだい？彼女のこと？それとも、君のことかな？」

「両方だ。聞きたい。この駄の主は、どんな奴だつたんだ？」

「・・・へえ。それは興味からかい？それとも・・・。」

「危険があるのなら知つておきたい。俺一人ならともかく、イリシアも居るんだ。大体にしてあの部屋は普通じゃない。」

「……確かに、彼は危険な仕事をしていた。殺人が生業つてわけじゃないみたいだけど、それに近いようなことはしていたよ。ただ、仕事の主は人探しや要人警護がほとんどだったみたいだけどね。・優秀だったみたいだよ。」

・・・なるほど、探偵まがいのことでもしていたのか。それなら、部屋に自分の足取りを残さないようにするのも解る。

「しかし突然、彼は死んだ。眠ったまま、それきり魂が消滅してしまった。・・・前に言つたように、原因はわからない。ただ、君たちが『死』を不幸なものだとするなら、確かに彼は『不幸な死』を遂げたよ。自分の『死』を予期することなくこの世界から消滅してしまったのだからね。」

それが本当に不幸なのかどうかはわからない。苦しそうに逝けたのならある意味幸せだつたと言えるかもしない。

「実はね、今日は君に知らせなきやいけないことがあるんだ。」

「なんだ? 蔽から棒!」。

アトウラは、いつになく真剣な表情で俺の顔を見据える。

「・・・それを識ることは、君に今の生活を捨てると同じことと同じだ。その代わり、君の前世のことも識ることになるだらう。逆に識らなければ、このまま、人間らしい生活をずっと続けられる。危険も無い、それは保証するよ。」

・・・識る?・・・どうこうことなんだ?

「それは、一択だといふことか？」

「・・・・やうなるね。君はどちらかを選ばなければならぬ。・・・・どちらを選んでもかまはない。どちらも、『結果』でしかないから。僕は君に『問う』ことしかできない。一一に一つだ。・・・・さあ、君はどう答える?」

生活を捨てる。・・・・それは即ち、全てを捨てるということか?今的生活・・・・こののんびりとした毎日のことだろうか。・・・・識れば、俺は危険の中に放り込まれることか・・・?

アトウラは、俺の顔を見据えたまま動かない。・・・・『裁定者』の名の通り、最後の審判を待つ罪人の気分だ。・・・・質問はこれ以上受け付けてくれそうにない。俺は、決めなくてはならない。・・・・識るか、識らないか。・・・・俺は・・・・俺は。

第十九幕 空白

- 19 -

「・・・よかつたのかい？」

何時から居たのか、ナイアラが、アトウラに尋ねる。

「・・・また君か。彼らの選んだことさ。それに対しても僕に異存はないよ。」

「しかし、彼らの力が無いとこの世界はいずれ滅んでしまうんだよ？」

「それも一つの『結果』さ。無理に仕向けたところで我らの神は、それを望まない。・・・何かの犠牲を払ったところで、神はそれをお許しにならない。『クルトゥル』の愛は、全ての生命にこそ注がれているんだ。」

「・・・まったく、君が考えそなことだね。やれやれ、『クルトゥル』は何を考えて君達を造ったんだか。」

ナイアラが肩をすくめて呆れた顔をする。そして、言葉を違う方向に向けた。

「・・・君もそなは思わないかい？『アストアラト』。」

「・・・。」

声を掛けられた主は、アトウラとは対極にある
蒼く光る髪と
髭、深紅に輝く瞳を持った、深淵の主。その堂々たる面持ちは、厳
として凜々しく、また全てを威圧するかのよつだ。

「・・・君も来てくれたんだ、アストアラ。」

「望むか望まざるかに関わらず、我らの神は等しく尊大である。我
がすべきは・・・我等が母、『クウルトゥル』の使命を果たすこと
のみだ。・・・久しいな、アトウラ。」

アトウラがアストアラと呼んだその凜々しき緋眼の男は、アトウラ
に軽く挨拶をすると、次はナイアラのほうを向いて言葉を投げ掛け
る。

「 そして『大いなる使者』、ナイアルラトホテップよ。・・・
貴殿までこの場に居られるとはな。・・・『旧きものども』の機嫌
取りをされずともよろしくのか?」

アストアラが皮肉を洩らす。

「あつははは！相変わらず面白いなあ、君は。だから言つてること。
私はいつでも君達の味方だつて。」

「・・・。」

アストアラが眼を細める。彼の深紅の瞳にも、ナイアラの真意は見
定められない。アトウラが口を挟む。

「・・・とにかく、彼らは自分たちの道を進むことを決めたんだ。
僕たちに今出来ることは、『旧きものども』の計画・・・『アトウ

モス』の覚醒を少しでも延ばすことだけ。・・・「五年、いや百年でも延ばせれば、彼等が再度転生したときどうにかできるかもしない。それに期待するしか他に方法は無いさ。」

「・・・それはまた一か八かな期待だねえ。」

ナイアラが肩をすくめる。

「仕方あるまい。全ては『クウルトゥル』の導き。我らはそれに従うまで。・・・貴殿こそ、こんな処で油を売っている場合では無いと思うがな。」

「あはは、そうだったね。私にはやるべきことがあった。」

ナイアラは一人に向かつて手を軽く振ると、一言だけ放つ。

「・・・私は私でやらせてもらひよ。」

そいつひとつと、暗闇の中に姿を消す。

「・・・。」

沈黙。

彼は一つの選択肢のうち、『識らずに生きる』道を取った。それは様々な可能性のうちの一つ。誰も彼らを責めることは出来ない。やがてくる破滅への足音は、一步、また一步と近付いていた。

・・・後の彼らの世界の行く末は、誰の識る処でもない。

- 21 -

男は言った。

「それでも・・・俺は、識らなくてはならぬ。」

裁定者である彼もまた問いただす。

「それを識ることは君を、そして彼女をも危険に陥れることになるかもしない。・・・本当に、それでもいいのかい？」

碧眼の彼は、真っ直ぐに男のことを見つめていた。

「・・・俺は、これと同じようなことを以前も、そして何度も繰り返してきたような気がする。・・・そして答えは『YES』だ。あいつにもし危険が訪れることになるといふのなら・・・。」

男は、然とした態度で彼を見据え返す。

「今度は、絶対に俺が守る！・・・もう一度と、同じことを繰り返したりはしない！・・・何故だかそう思ひ。・・・俺は変か？」

彼は、少し戸惑った様子の男を見つめる。そして、軽く微笑むと、答えた。

「・・・いや。何がおかしいんだい？そもそも僕は言ったよね？『君も男なら、覚悟を決めなよ』と。・・・それでいいんだ。さすが

僕が、そして大いなる母『クウルトゥス』が産んだ『始まりの子』だ。・・・僕の眼に狂いはなかつたようだね。』

彼は終始嬉しそうだつた。そして、更に続ける。

「君は。そして君達は識らなくてはならない。大いなる、永きに渡り繰り返されてきた、『旧きものども』と、我等『新しき希望』との因縁。」

彼は一瞬、表情を変える。

「『ルルイエの審判』の恋まわしき記憶を――！」

突然、辺りが暗闇に沈む。次に男の眼に映つたのは、鮮明なる破壊、そして、神々しきほどの恐怖。

『旧きものども』の絶望的な恐怖。そして、その絶対的な力のもたらした、戦慄なる破壊の全てを。

これは大いなる戦い。

そして、全ての終わりであり、『新たなる始まりの序章』であることを。

第一十一幕 始まりのナ

- 21 -

紅き彼は言った。

「遙かなる遠き彼方の向こう。この世界を産み出せし万物の母『クウルトゥル』は仰つた。この混沌たる世界に何の意味があらう、と。」

「

また、蒼き彼も告げる。

「混沌たる世界に、大いなる存在など無意味だつた。時の流れも、己が存在する意味すらも消え果ててしまつほどの暗き空間。母なる『クウルトゥル』は、無に有を築こうと、魂たる、一十八の存在を造り上げた。己が力の全てを分け与えて。」

彼等は共にお詠う。

『全ての神は、力の全てを始まりの子らに注ぎ、更には我等、裁定者たる七体の、己が肉体の分身を造り賜れた。そして無に有を造り賜れたクウルトゥルは、その身を以つて、この世界を造り上げられた。即ち、この世界こそ彼。この世界に生きとし生ける者全てが彼自身なのだ。』

碧き眼を持つ彼は述べる。

「だけど、『クウルトゥル』と同じ存在である彼等　　『旧きものども』　　は、クウルトゥルの行った『無に有を造り上げる』

行為と、彼の凄まじい力を疎ましく思つた。故に彼等は、この世界

『クウルトル自身』を滅ぼそつとしたのさ。』

紅き瞳を持つ彼も言つた。

「それこそが、遙か何億年も以前に行われた『ルルイエの審判』即ち、クウルトルを『ルルイエ』に封じ込めようとしたのだ。」

映像は、正に異形の城。物体でもなく、生物でもなく。その不可解な『モノ』は、木々や全ての生き物　魚や獸や人間　を飲み込み、肥つてゆく。

「『ルルイエ』は、この世界上にある全ての生命を喰らい尽さんとした。或る者は逃げ惑い、或る者は哭き叫び……。そして或る者は戦つた。我等七体の『裁定者』。そして、選ばれし、君達と同じ『始まりの子』の魂を宿す者達。……でも、事態は遅すぎたんだ。」

「

緋色の彼は唇を噛み締める。

「……我等は戦つた。持てる全ての力を振り絞り、『ルルイエ』を再び宙へと戻す為に。しかしそれは叶わなかつたのだ。一度呼び起こしてしまつた『ルルイエ』を再び宙へ戻すことは不可能。……例え『旧きものども』の力を以つしてもだ。」

蒼き彼は再び紡ぐ。

「我等は……最後の手段を講じた。いや、講じざるを得なかつたのだ。……神の存在を超えた、『果てしなき破壊』の前には、そ

「せざるを得なかつた。」

緋色の彼も再び紡ぐ。深く唇を噛み締めながら。

「・・・多くの兄弟達が、魂達が『消滅』したよ。君達の言葉を借りるのならば、それは『死』なのだろうね。そう、彼等はそのかけがえない犠牲を払つて、自らを礎とし・・・『ルルイエ』を封じ込めたんだ。南太平洋沖、南緯47度9分、西経126度43分。それこそ忌まわしき、『ルルイエ』の封印されし場所だ。」

緋色の彼 アトウラは、男に告げる。

「その忌まわしき『ルルイエ』の審判』から幾億の年月が過ぎた今
再び、『旧きものども』が動き出した。『新たなる絶望』
をその手にして 「!-」

男は、余りにも絶望的な映像と、アトウラの言葉に、絶対的な恐怖を感じていた。背中を冷たい汗が伝づ。言葉を失いながらも、やつとのことで彼は発する。

「・・・俺に・・・どうしようと・・・? そんなとんでもない奴らを相手に・・・何をしろと云つんだ 「!-」

恐らく、この世に生きる者ならば誰しもが彼と同じ言葉を発していただろう。常人より腕に自信のある彼ですらである。気の弱い者ならばそれだけで発狂していたかもしれない。・・・それほど彼が見たモノは凄まじかった。

しかしアトウラは、真っ直ぐ彼の眼を見据えたまま、言い放つ。

「・・・君にしか出来ないことだよ。・・・今すぐことは言わない。まだ時間はある。だけど、その時間は限りなく少ない。残り少ない時間の中で、君は見つけなくてはならない。君に宿った大いなる力『クウルトゥルの力』をコントロールする為の術を。」

そして蒼き彼 アストアラも彼女に告げる。

「汝に秘められし力・・・その力こそが、旧きものどもに対抗できる唯一の力　　『クウルトゥルの力』なのだ。」

戦慄なる恐怖の前に、彼女は氣を失いそうになりながらも必死で耐えていた。長く・・・永く繰り返されてきた過ちを、もう一度と繰り返さない為に。ただ、それだけの為に。

「まず汝は知らねばならぬ。己之力。己がすべきこと。行くがいい。
・・・汝の旅立つべき場所は　　。」

「『アーカム』。アメリカはマサチューセッツ州、セイレムに名を連ねる都市。・・・君達はそう呼ぶね。その地に、ミスカトニックという図書館がある。・・・まずは調べるといい。人は歴史と言う名で様々な記録をしてきた。・・・すでにこの世界ではほとんど薄れてしまった記録。だけど、君にとつては必ず役に立つモノが見つかるだろ?。」

アトウラは彼に一冊の本を手渡す。

「これはなんだ・・・?」

「『記憶』や。ただし、そのままで君にとつて何の意味もない。それは、君達が『魔本』と呼んだり『魔導書』と呼んだりするものだ。開いてご覧。」

彼は、皮で造られた分厚い表紙をめくる。

「……これは、白紙……か？」

「そう。それはそのままでは何の意味も介さない。……まずは『記憶』を辿るんだ。時がくれば、その魔導書、『クルトゥース断章』は君にとって大きな武器となるだろ？……どんな力が眠っているのかは分からぬけどね。」

男は、『クルトゥース断章』と呼ばれたその本の背表紙を握り締める。

「その本のページを完成させると、君の失った記憶を取り戻すことにも繋がる。どうだい？ 悪い話じゃないだろ？」

アトウラは、おどけて見せる。

「……ふん。この間の『交換条件』に比べりや、ずいぶんと割に合わない気はするがな。」

彼の言い回しに、男も皮肉のよひに言い返す。

「あはは、そう言わないでよ。それでも大分サービスしてるんだよ？……最も、僕が出来るのはここまでだ。後は君次第。どんな結果になつても、君を責めたりしないよ。」

「・・・ふん。」

男は軽く嘲り、呟いた。

「やつてやるや。どうせ俺はやるしかないんだ。・・・この胸のわだかまり・・・俺の記憶を取り戻す為なら、なんだつてな。」

そして彼等は、螺旋の淵から抜け出した。己に課せられた使命。・・・最も、彼等にとって重要なのは、そんなものではなかつたのかもしない。しかし、歩き出した。

幾度と無く味わってきたであろう虚無感。葛藤や苛立ち、哀しみ。全てを背負つて。

これは始まりだ。彼等と、そして未来への序曲。^{アーチャー}彼等に課せられた道は、恐らくは険しいものになるだろう。だが、それでももう、彼らが立ち止まることは無い。

第一十一幕 始まりのナ（後書き）

この主人公のお話は、ここで一旦休憩です。

世界を舞台に、繰り広げられてゆく大いなる神話。

クルトゥルは一体、何の為に世界を創り上げたのか。

世界は、どうなるのだろうか。

神話に完結はありませんが、この後も、更にこれからも世界は続いて行きます。

様々な視点から、世界を守る為の戦いも続くはずだと思します。

しばらくは、「クルトゥース～碧槍の帝～」にて、日本に舞台を移して更に活躍させて行きたいと思いますので、応援、よろしくお願いします。

玄武でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8325c/>

クルトゥース断章

2010年10月21日21時15分発行